厳粛な綱渡り

全エッセイ集

大江健三郎

文藝春秋新社

厳粛な綱渡り　全エッセイ集

定価　六〇〇円

昭和四〇年三月一日　初版発行
昭和四〇年四月一日　三版発行

著者　大江健三郎©

発行者　上林吾郎

発行所　文藝春秋新社
東京都中央区銀座西八ノ四
電話（代）五七一―三一四一番
振替口座　東京七八七四三番

印刷所　図書印刷
製本所　中島製本

＊落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

目

次

＊この本全体のための最初のノート……11

第一部　《戦後世代のイメージ》といちばんはじめの29篇のコラム……15

＊第一部のためのノート……17

＊《戦後世代のイメージ》……19

徒弟修業中の作家……40
犬の生死と文壇と……42
伝統と文学……46
初めはこう考えた……48
批評家と若い作家……50
匿名の精神を非難する……53
影響だらけと深淵……55
新・戦後派の心……56
二十歳の日本人……58
現場の教師たちへの拍手……61
売国的と愛国的……64
人殺したちの中の一人……65
北京の青年たち……71
フランスの若い人たち……74

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

奉安殿と養雛温室……76
警官になった弟の肖像……77
59年型の日常生活……78
ストライキ 78　めさきの問題 81　おかしな災難 84
子供の取引 78　芸術家だらけ 81　人気 84
半裸の娘たち 79　パリマッチ誌 82　憂々帳 85
女優と防衛大生 79　家庭教師 82
おとなのむずかり 80　署名 83

第二部　強権に確執をかもす志……87

＊ 第二部のためのノート……89
民主主義は踏みにじられた……91
ふたつの六月の間……93
いつまでもむごたらしい死者……96
＊ 強権に確執をかもす志……97
○戦後青年の日本復帰……102
一九六〇年代の赤毛布……114
旅行カバンのなかの未来イメージ……118
＊ ぼく自身のなかの戦争……122
＊ 戦後世代と憲法……132

＊憲法についての個人的な体験（講演）……137
第三部　文学とはなにか？……153
＊第三部のためのノート……155
＊〝分別ざかり〟のイメージについて……157
＊私小説について……171
＊戦後文学をどう受けとめたか……179
困難の感覚ということ……187
＊文学における民族性の表現……195
＊反逆的なモラリスト＝ノーマン・メイラー……207
＊飢えて死ぬ子供の前で文学は有効か？……215
第四部　性的なるもの……225
＊第四部のためのノート……227
＊われらの性の世界……229
性の奇怪さと異常と危険……238
＊《われらの時代》とぼく自身……243
結婚および死……247

性犯罪者への挨拶……256
廿世紀小説の性……259
＊現代文学と性……263
性のゆがみと文学……269

第五部　ぼくはルポルタージュを作家修行とみなす……271

＊第五部のためのノート……273
＊独立十年の縮図——内灘……275
維新以後三代目の印象——郡山……282
新旧・二つの顔——倉吉……289
＊失業に悩む旧軍港——呉……296
イタコとの対話——恐山……303
＊今日の軍港——横須賀……309
＊プラットフォームの娘たち——鉄道弘済会……322
＊アジア・アフリカ人間の会議——AA作家会議東京大会……335
＊未来につながる教室——群馬県島小学校……344
＊少年たちの非行のエネルギーは抹殺されるべきものか？——少年非行問題……356

第六部　クラナッハ論と芸術およびジャーナリズムにかかわる48篇のコラム……367

＊第六部のためのノート……369
＊今日のクラナッハ……371
演劇と映画をめぐるコラム……381
ニコラ・バターユという天才……381
ウェスカアの描写力……387
マリリン・モンローの世界……390
審　判……392
地球は青かった……396
音楽をめぐるコラム……399
モダン・ジャズとぼく自身……399
アート・ブレイキーとジャズ・メッセンジャーズ……404
カウント・ベイシー……405
抵抗するジャズ……407
わが最上の音楽家・武満徹……409
《弦楽のためのレクイエム》というレコード……411
ショパンの生家……412
展覧会をめぐるコラム……415
岡本太郎の王位請求……415

サハラ先史壁画……418
ダ　リ……420
土門拳のヒロシマ……422
小説家の内部についてのコラム……426
《小説とはなにか？》……426
絶望的な困難……428
危険の感覚……430
難解さのすすめ……433
ぼく自身のための劇場……435
「犬の審問所」の幻影……438
わが小説……439
対話と自己告白……441
最初の詩……444
ぼくの戦争文学……446
ぼくの小説作法……448
小説家の無意識……450
芥川・直木賞展……453
＊**作家たちをめぐるコラム**……455
ラブレー……455
オーデン……459

ロレンス……461
永井荷風……464
芥川龍之介……467
ドストエフスキー……470
ガスカル……473
ノーマン・メイラー……475
ジャーナリスティクなコラム……478
文化的鎖国のすすめ……478
オリンピックと踏み絵……480
風変りな連中……482
62年型の日常生活……485
ネズミの冒険 485
ニッポン政治プロレス 487
個人経営の原爆 488
62年タイプの思い出 489
象か気どり屋のネズミか……489
善き若者たちの危険……493
日本の男が女性化したという説について……495
日本に愛想づかしする権利……502
＊
＊ この本全体のための最後のノート……508

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

厳粛な綱渡り

＊この本全体のための最初のノート

ずいぶん長い間ぼくは、《厳粛な綱渡り》というタイトルの詩集を刊行したいとねがってきた。それはぼくの小説家としての仕事を、現実生活とみなすとすれば、ぼくの夢の生活、ひっくりかえされた裏がわの生活の内容となるべきものだった。ところが、ぼくは二十二歳から二十九歳にいたる、足かけ八年間のあいだに、いくつかの断片をのぞけば、ただ一篇の詩を書いただけだった。ここにその詩をひいておきたいと思う。タイトルは《死亡広告》である。

純粋天皇の胎水しぶく暗黒星雲を下降する
永久運動体が憂い顔のセヴンティーンを捕獲した八時十八分
隣りの独房では幼女強制猥せつで練鑑にきた若者がかすかに
オルガスムスの呻きを聞いて涙ぐんだという、ああ、なんていい……
愛しい愛しいセヴンティーン
絞死体をひきずりおろした中年男は精液の匂いをかいだという……

さて、ぼくは詩をほんの一篇しか書かなかったが、そのかわりに、相当な量のエッセイを書いてきた。ある批評家が、ぼくのように二十代の前半から、ジャーナリズムとの相関において生きてゆくことになった人間の生活はかなり特殊なものになるだろうと予言したことがあった。確かに、ぼくの現実生活とは、小説およびここにおさめたエッセイによって直接なりたってきたのであり、ほかにはどのような現実生活もなかったばかりか、夢の生活は、たった一篇の詩にすぎなかったというわけだ。しかしぼくは、いま三十歳の誕生日をむかえようとして、自分の二十代のエッセイをすべてあつめ、あらためて、これが、幾冊かの小説とともに、ぼくの二十代の現実生活の全体であったことを確認することにした。そして、この本にぼくが、《厳粛な綱渡り》という総タイトルをつけるのは、ぼくの二十代の小説家としての現実生活が、他人の眼からは滑稽な綱渡りに見えたにしても、ぼく自身にとっては、おそらくはすべて

の本職の綱渡り師においてと同様、厳粛な綱渡りであったと信じるからである。

あの、予言的な批評家の言葉どおり、ぼくの二十代の生活は、ずいぶん特殊なものだった。ぼくはあまり練習をつまずに、ただ、自分の生得の平衡感覚、あるいは生得の冒険心（そういうものがあれば、の話だが）を頼りにして、大急ぎで綱の上にのっかってしまったのであった。したがってとくに多数ではないにしても、かなりの観衆がぼくを見物しているまえで、ぼくはのろのろ前に進もうとし、恐怖心やらつかのまの安堵やら、眼もくらむ絶望感やらをあじわい、そしていま、足かけ八年間をふりかえってみて、自分自身がどれくらいのトレーニングをつんだかは、おぼつかないのである。しかし、ともかくぼくはこのようにマスコミュニケイション下の現実生活をはじめ、それをつづけてきた。ぼくはあらためて自分の現実生活の総量をひきうけるつもりで、この一冊の本を刊行しようとするわけである。

ぼくがこの五一〇ページの本にあつめたエッセイを書いた二十二歳から二十九歳にいたる足かけ八年間は、いわば、試みては失敗するためにもっとも適当な年齢の期間だった。二十歳より若いあいだに失敗すると、あまりに脆い頭と肉体がすっかり破壊しつくされてしまう可能性がある。三十歳より以後に失敗すれば、それは真の、とりかえしのつかない失敗になりかねない。もっとも、ぼくは自分の三十代に相当の広さの失敗を試みるためのグランドを準備したいと考えているのだが。

そういうわけで、この本のなかのぼくは、じつに様ざまの試行錯誤をおかしているにちがいない。しかしそういう欠陥は、なかば編年体のこういうタイプのエッセイ集では、寛大な読者に、見逃してもらえるものであると信じたいわけである。

さてぼくは、どのような種類のエッセイにおいても、書き手が、権威の声をもってかたっているとき、それを許容できない。もし、ぼくのエッセイのうちに、自分自身の内なる弱点をカヴァするために、こけおどかしの権威を借用した文章があれば、いかなる寛大な読者に対しても、ぼくはそれを恥じねばならないだろう。日本語のように書き手の話しぶりに単純な変化をあたえることのできる言語では（それはアクセルやらブレーキやらがすばやく動き、そして小廻りのきく小型自動車みたいだ）ちょっとした権威の響きを援用することなど、いかにも初歩的な技術である。

それではどのようなエッセイが良質なそれかといえば、

権威の声でかたっていない赤裸のエッセイであるにもかかわらず、あきらかに人間的な威厳の感じられる文章である。そしてそのような文章にいたることがもっとも困難な技術だ。ぼくは自分が本の形でのこしておきたいすべてのエッセイをあつめたこの本のなかに、そのような文章を見出すことができると主張する勇気はない。そこで次善のエッセイといえば、それは、切実な要求にかきたてられて、なりふりかまわず書かれた文章、あるいは、自分のもっとも愛するもの、熱情または敬意を感じるものへの感動が率直にあらわれている文章であって、そういう性格のものなら、ぼくはこの本のなかに数篇を見出すことができる。それが単にぼく個人の自己満足にとどまらないことをぼくは望んでいる。ともかくぼくはその不確かな期待において、この五一〇ページの本を出版する。最小限どのエッセイを読んでいただきたいか、というぼくの読者への希望を示すため、すくなくともぼく自身が重要とみなす文章のタイトルに＊マークをつけた。

＊ **この本全体のための最初のノート**

＊ **第一部についてのノート**

＊ 戦後世代のイメージ

＊ **第二部のためのノート**

＊ 強権に確執をかもす志

＊ ぼく自身のなかの戦争

＊ 戦後世代と憲法

＊ 憲法についての個人的な体験（講演）

＊ **第三部についてのノート**

＊ 〝分別ざかり〟のイメージについて

＊ 私小説について

＊ 戦後文学をどう受けとめたか

＊ 文学における民族性の表現

＊ 反逆的なモラリスト＝ノーマン・メイラー

＊ 飢えて死ぬ子供の前で文学は有効か？

＊ **第四部についてのノート**

＊ われらの性の世界

＊ 《われらの時代》とぼく自身

＊ 現代文学と性

＊ **第五部のためのノート**

＊ 独立十年の縮図——内灘

＊ 失業に悩む旧軍港——呉

＊ 今日の軍港——横須賀

＊ プラットフォームの娘たち——鉄道弘済会

＊ アジア・アフリカ 人間の会議
＊ 未来につながる教室——群馬県島小学校
＊ 少年の非行のエネルギーは抹殺されるべきものか
——少年非行問題
＊ 第六部のためのノート
＊ 今日のクラナッハ
＊ 作家たちをめぐるコラム
＊ 日本に愛想づかしする権利
＊ この本全体のための最後のノート

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com